國學院大學学術情報リポジトリ

「剣道の国際的普及に関する意識調査」の、因子分析による項目精査の試み

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2023-02-06
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 植原, 吉朗, 神庭, 直子
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001274

「剣道の国際的普及に関する意識調査」の、因子分析による項目精査の試み

植原 吉朗　神庭 直子

【キーワード】
剣道　国際的普及　質問紙調査　因子分析

Ⅰ．はじめに（目的）

筆者（植原）は剣道の国際化・国際的普及に関わる現状と課題を10年以上に亘り追究し、その一端は拙いながら論文としても示してきた（植原:2002･2003）。剣道は、その普及のあるべき理想はどうあれ、競技スポーツとして国際的に普及している実態があるのは現実である。ならば、剣道は修得価値のある日本の身体・精神文化として実践者に受容されているのか、それともそれらの文化性が変容して単に日本発祥の競技スポーツの一つとして認知されているに過ぎないのか。筆者はそのような疑問を提起し、剣道の国際的普及の理想と実態について、国内外の剣道関係者に問うことでその認識を明らかにすることも試みてきた（植原:2005a）。

具体的には、

１）剣道の文化性、精神性、競技性をどう認識するかを問う項目を策定し質問紙を作成する。

２）国内、国外において質問紙調査を実施し、調査対象の地域差、文化圏の違い、政治経済状況、職業、剣道開始・継続動機、実践経歴、年代、などによって剣道がどのように捉えられているのかの差異を捉える。

の二点を掲げ、質問紙を作成し、調査を実施した。その作成・実施過程については、内容的妥当性検証も含め、拙著・拙稿に詳細を報告した（植原:2005b･2006･2007）。この際に作成した日本語質問紙は、英語、韓国語、中国語（北京語・広東語）、フランス語、ロシア語にも翻訳され（いずれもネイティブチェックを経ている）、剣道の普及した海外地域での調査実施にも活用されている（植原:2012、鎌倉ら:2009、天野ら:2013）。

しかしながらこれまでの調査結果を概観すると、質問項目数が49項目に亘り、一部の項目では回答分布の偏りが見られ調査趣旨への寄与が低いものがあったこと、調査実施上で回答者の負担感が若干高いこと、また質問紙作成時にカテゴライズした7要因（後述Ⅱ－２．参照）の独立性が十分に検証されてないことなどが懸念されてきた。

そこで今回は、これまで収集したデータからまず日本語調査用紙での日本人からの回答を活用

し、因子分析により各項目の有効性の確認と、抽出された因子と質問紙作成時の７要因（項目グループ）との関連性（一致程度）などを考察し（神庭が担当）、今後の調査に向けてさらに有効性の高い質問紙となるよう、各項目を精査することを試みた。

将来的には外国語質問紙により収集したデータを用いての因子分析結果とも照合し、項目を精選し直して、より調査実施しやすい質問紙を再作成することを企図している。

Ⅱ．方法

１．質問項目の出典

まず質問紙作成の際に構成された質問項目の出典について、あらためて説明を付す。国内からは少年の剣道に対する見方、意識を調査し取り纏めたもの（全日本剣道連盟科学委員会研究調査部、代表・塩入宏行、「小・中学生の剣道観」:1996）や指導者側の意識（浅見裕、「武道（剣道）の普及・継続に関わる要因の調査研究－少年剣道を支援する大人の意識について－」平成９・10年度科研費基盤研究(C)(2)09680077: 1999）、また海外の出典としては、英文剣道誌『Kendo World』が実施した、剣道のオリンピック参画への是非とその影響についてのwebアンケート（2001）に基づいている。さらに筆者が、国際剣道に対する認識が深い有段者に対し実施したインタビューからも、特に共通の問題意識として提示された内容について質問項目に採用した。

出典趣旨詳細に関しては、拙稿（植原:2005）を参照されたい。

２．質問項目の内容と尺度

以下に示す49の項目が日本語設問文である。日本語の他に作成した、英語、韓国語、中国語質問紙については拙稿（植原:2006）を参照されたい。

また、質問紙作成時に項目内容をカテゴライズした7要因（項目グループ）についても、項目群毎に以下に示す（片括弧番号）。

〈設問文〉

１）試合の要否・競技偏重の弊害（1～5）

1. 剣道において試合・競技は重要で不可欠なものである。
2. たとえ試合がなかったとしても剣道を続けたい。
3. 試合・競技の機会が多くても、剣道の本来の姿が歪むことはない。
4. 試合は、勝たなくては意味がない。
5. スポーツ的な勝利志向は、剣士の名誉欲、物質欲を煽る。

２）海外普及の是非・要否（6～9）

6. 剣道は広く世界に普及すべきである。
7. 世界の多くの人に剣道を始めることを勧めたい。

8. 剣道は多くのメディアでもっと紹介される方がいい。
9. 国際剣道はもはや日本だけが主導するものではない。

3）オリンピック参入の是非（10～19）

10. 剣道はオリンピック種目になるべきである。
11. 剣道がオリンピック種目になると、相互尊重や礼法は軽視されるようになるだろう。
12. 剣道がオリンピック種目になると、日本の伝統的礼儀作法や精神性は重視されなくなるだろう。
13. 剣道がオリンピック種目になれば、世界各国の剣道人口が増加するだろう。
14. 剣道がオリンピック種目になれば、各国の剣道組織にとって組織運営や財政的に良い影響がある。
15. 剣道がオリンピック種目になると、勝敗がより重要な要素となるだろう。
16. 剣道がオリンピック種目になったら、日本は剣道の宗主国ではなくなるだろう。
17. 武道としての剣道はオリンピックにはなじまない。
18. 剣道がオリンピック種目になったら、選手になって出場したい。
19. 剣道がオリンピック種目になると、誰もが勝敗を理解できるようルール変更が求められるだろう。

4）試合判定の明瞭性と近代化、審判の問題（20～26）

20. 剣道の試合で誤審があるのはやむを得ない。
21. 有効打突の判定にも異議の申し立てが認められるべきである。
22. 剣道の試合でも、声援や楽器などのにぎやかな応援が認められるべきである。
23. 試合での「一本」がわかりにくいことが、剣道の普及の障害となっている。
24. 剣道にも柔道のようなポイント制（「効果」、「有効」、「技あり」など）を導入するとよい。
25. 国際剣道大会の場合、参加国間の競技上の平等性、公平性が十分保証されているとは言えない。
26. 公平、正確な判定のため、剣道にもフェンシングのように何らかの電気的な自動得点確認システムが必要だ。

5）剣道独自の特性有無と維持（27～38）

27. 剣道では礼儀正しさが身に付くなど、他のスポーツよりも教育的意義が大きい。
28. 反則を活用して勝つくらいなら、反則を戒めて負ける方がいい。
29. スポーツマンシップは剣道の重要な要素である。
30. 勝敗結果重視は、剣道にふさわしくない。
31. 剣道は、心身鍛練の過程にこそ価値を置く。
32. 普及することが優先されると、やがて剣道の本質的価値は見過ごされてしまうだろう。
33. 剣道を広めることが何より重要で、そのために伝統的側面の関心が多少損なわれるのは仕方ない。
34. 他のスポーツと同じように、剣道選手はもっと自分の思うように自由に振る舞ってよい。
35. 剣道は保守性や古典性を脱して、時代に適応する必要がある。
36. 竹刀で打つ動作を、刀で斬る動作を基準として評価するのは、現実には困難である。
37. 剣道を通じて教えられる心構えや理念を理解するのは難しい。

38. 剣道に関する心構えや理念は、私のところでは教えられていない。

6）用具の改良、ドーピングの懸念（39～44）

39. 伝統的手法で作られる剣道具とその使用は､標準として今後も維持尊重されなくてはならない。
40. 使いやすく安価で科学的に改善された剣道具がもっと開発されるべきだ。
41. 剣道着や剣道具に、色彩やアクセサリーなどのファッション性がもっと認められてよい。
42. 剣道がオリンピック種目になったら、薬物使用（ドーピング）が問題になるだろう。
43. 剣道の試合にも、薬物使用の効果はあると考えられる。
44. ドーピング検査は、国際的な剣道の公式大会にも導入されるべきである。

7）段位制の意義（45～49）

45. 段位制は、他の競技スポーツにはない独自性がある。
46. 現在の段位制は多くの人の実際の能力水準を正確に示していない。
47. 段位制では剣道の真の能力水準を正確に提示できない。
48. 段位制はその存在と質が維持されなくてはならない。
49. 段位審査のやり方は変えるべきだ。

回答尺度について、フェイスシート以降の設問には５段階の回答（５件法）を求めることとした。５件法の用語設定には、同意・不同意の程度表記にさまざまな言葉が用いられ、それによって回答の傾向が微妙に変化することが知られているが（続ら:1975)、本調査では、

５－強くそう思う
４－そう思う
３－どちらともいえない
２－そう思わない
１－全くそう思わない

を採用している。

３．採用データ

調査は、2005年１月から３月にかけて、国内外にて実施したが、国内での実施は以下の通りである。

・東京（地域の少年剣道大会時）：52名
・千葉（外国人留学生武道講習会参加者）：11名
・東京近郊大学生（７大学剣道部員）：405名

国内計：468件、

このうち、今回の因子分析には上記の東京および近郊の大学生の回答から、分析に有効な欠損値のないもの（387名）を採用した。

Ⅲ．結果

１．回答者の属性

Ⅱ－３．で触れたように、分析に使用した質問紙の回答者は全員東京および近郊の大学生であり、年齢分布は10歳代（18歳以上）が210名（54.3%）、20歳代が177名（45.7%）である。男女別人数は、男性300名（77.5%）、女性87名（22.5%）であるが、分析上は特段の峻別はしていない。所有段位分布は二段～四段である。日常の週稽古回数は、0～2回が32名（8.3%）、3～4回が89名（23.0%）、5～ほぼ毎日が，266名（68.7%）であり、大半が３回以上～ほぼ毎日と回答している。競技歴については、試合経験のないもの1名（0.3%）、試合をしたことがあるもの56名（14.5%）、地域の大会などで入賞の経験がある者327名（84.5%）、国の代表として国際大会に出場したことがある者が3.名（0.8%）となっており、ほぼ全員が試合・大会出場を経験している。

２．「剣道の国際的普及に関する意識」の因子構造

因子分析には、Ⅱ－２．で示した49項目への回答に欠損値のない387名のデータを用いた。

各項目の得点分布を確認したところ、いくつかの項目で得点の偏りが見られたが、いずれの項目も剣道の国際的普及に関する意識を測定する上で重要な内容を含んでいると判断し、すべての項目を分析に用いることとした。

剣道の国際的普及に関する意識についての49項目に対して、因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った結果、初期の固有値は、第1固有値より $\lambda = 4.575$，4.106，3.874，2.256，1.942，1.818，1.508，1.433，1.319，1.309・・・であり、固有値の減衰状況および因子の解釈可能性を考慮すると、6因子構造が妥当であると判断された。そこで、再度、因子数を6に指定した因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った。因子負荷量の基準を絶対値.400とし、いずれの因子にも負荷しない項目および複数の因子に負荷する項目があった場合にはその項目を削除し、分析を繰り返した。プロマックス回転後の最終的な因子パターンと因子間相関を**表１**に示した。

表１　「剣道の国際的普及に関する意識」についての因子分析結果

1）～7）の片括弧番号は、質問紙作成時にカテゴライズした項目グループの分類　（*N*＝387）

		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	共通性
第Ⅰ因子　「剣道独自の特性と試合・審判のあり方」　（α＝.728）								
4）	公平、正確な判定のため、剣道にもフェンシングのように何らかの電気的な自動得点確認システムが必要だ。	**.602**	-.045	.084	-.117	.075	-.102	.331
5）	剣道を広めることが何より重要で、そのために伝統的側面の関心が多少損なわれるのは仕方ない。	**.586**	.110	-.028	-.032	-.078	.030	.379
5）	他のスポーツと同じように、剣道選手はもっと自分の思うように自由に振る舞ってよい。	**.540**	.009	.015	-.013	-.017	.162	.347
6）	剣道着や剣道具に、色彩やアクセサリーなどのファッション性がもっと認められてよい。	**.521**	-.100	-.018	.110	.106	-.149	.320
5）	剣道は保守性や古典性を脱して、時代に適応する必要がある。	**.506**	.059	-.005	.074	-.004	.127	.330
4）	剣道にも柔道のようなポイント制（「効果」、「有効」、「技あり」など）を導入するとよい。	**.446**	.073	-.002	.000	-.018	-.100	.194
4）	剣道の試合でも、声援や楽器などのにぎやかな応援が認められるべきである。	**.439**	-.131	.001	.097	-.053	.167	.302
5）	剣道に関する心構えや理念は、私のところでは教えられていない。	**.432**	-.067	-.038	-.074	.088	-.142	.198
第Ⅱ因子　「海外普及の是非・要否」　（α＝.747）								
2）	剣道は広く世界に普及すべきである。	-.003	**.860**	-.025	.036	.048	-.019	.747
2）	世界の多くの人に剣道を始めることを勧めたい。	-.098	**.852**	.008	.020	.020	-.049	.724
2）	剣道は多くのメディアでもっと紹介される方がいい。	-.013	**.519**	.037	-.028	.038	.080	.290
2）	国際剣道はもはや日本だけが主導するものではない。	.215	**.416**	-.120	.044	-.037	.021	.275
第Ⅲ因子　「オリンピックへの関与と普及」　（α＝.775）								
3）	剣道がオリンピック種目になると、日本の伝統的礼儀作法や精神性は重視されなくなるだろう。	-.004	-.002	**.849**	-.002	.036	.126	.714
3）	剣道がオリンピック種目になると、相互尊重や礼法は軽視されるようになるだろう。	.016	.046	**.803**	-.017	.021	.146	.619
5）	普及することが優先されると、やがて剣道の本質的価値は見過ごされてしまうだろう。	.081	-.001	**.534**	.004	-.079	-.206	.336
3）	武道としての剣道はオリンピックにはなじまない。	-.102	-.139	**.525**	.082	.044	-.149	.433
第Ⅳ因子　「段位制の意義」　（α＝.765）								
7）	段位制では剣道の真の能力水準を正確に提示できない。	-.054	-.007	-.015	**.828**	-.025	.013	.670
7）	現在の段位制は多くの人の実際の能力水準を正確に示していない。	-.084	.053	.027	**.819**	.008	-.025	.652
7）	段位審査のやり方は変えるべきだ。	.234	.003	.029	**.534**	-.018	.003	.397
第Ⅴ因子　「ドーピングへの懸念」　（α＝.698）								
6）	剣道の試合にも、薬物使用の効果はあると考えられる。	-.058	-.033	-.078	.072	**.837**	.034	.700
6）	剣道がオリンピック種目になったら、薬物使用（ドーピング）が問題になるだろう。	.075	.039	.062	.015	**.686**	-.028	.490
6）	ドーピング検査は、国際的な剣道の公式大会にも導入されるべきである。	.069	.103	.046	-.138	**.493**	.024	.262
第Ⅵ因子　「勝敗の偏重」　（α＝.550）								
5）	勝敗結果重視は、剣道にふさわしくない。	.055	.138	.179	-.012	-.076	**-.676**	.467
1）	剣道において試合・競技は重要で不可欠なものである。	-.033	.133	.069	-.059	.000	**.524**	.302
1）	試合は、勝たなくては意味がない。	.003	.037	.127	.032	-.045	**.459**	.231
	回転後の負荷量平方和	2.451	2.208	2.264	1.918	1.557	1.526	
	因子間相関行列							
	Ⅱ：「海外普及の是非・要否」	-.025	—					
	Ⅲ：「オリンピックへの関与と普及」	-.200	-.183	—				
	Ⅳ：「段位制の意義」	.218	.021	.101	—			
	Ⅴ：「ドーピングへの懸念」	-.102	.018	.151	.050	—		
	Ⅵ：「勝敗の偏重」	.190	.241	-.157	.208	-.140	—	

因子分析の結果，第Ⅰ因子は、

・公平、正確な判定のため、剣道にもフェンシングのように何らかの電気的な自動得点確認システムが必要だ（Ⅱ－２で示したグループ４）の26）

・剣道を広めることが何より重要で、そのために伝統的側面の関心が多少損なわれるのは仕方ない（同、５）の33）

・他のスポーツと同じように、剣道選手はもっと自分の思うように自由に振る舞ってよい（同、５）の34）

・剣道着や剣道具に、色彩やアクセサリーなどのファッション性がもっと認められてよい（同、６）の41）

・剣道は保守性や古典性を脱して、時代に適応する必要がある（同、５）の35）

・剣道にも柔道のようなポイント制（「効果」、「有効」、「技あり」など）を導入するとよい（同、４）の24）

・剣道の試合でも、声援や楽器などのにぎやかな応援が認められるべきである（同、４）の22）

・剣道に関する心構えや理念は、私のところでは教えられていない（同、５）の38）

といった８項目から構成されており、最後の１項を除き、剣道の独自性や試合・審判に関する内容であることから、「剣道独自の特性と試合・審判のあり方」と命名した。

第Ⅱ因子は、Ⅱ－２で示したグループ２）に含まれる４項目すべてから構成されていることから、質問紙作成時に想定した項目グループ名をそのまま適用し「海外普及の是非・要否」[註)]と命名した。

第Ⅲ因子は、

・剣道がオリンピック種目になると、日本の伝統的礼儀作法や精神性は重視されなくなるだろう（Ⅱ－２で示したグループ３）の12）

・剣道がオリンピック種目になると、相互尊重や礼法は軽視されるようになるだろう（同、３）の11）

・普及することが優先されると、やがて剣道の本質的価値は見過ごされてしまうだろう（同、５）の32）

・武道としての剣道はオリンピックにはなじまない（同、３）の17）

といった４項目から構成されており、主として剣道とオリンピックとの関わりに関する内容であることから、「オリンピックへの関与と普及」と命名した。

第Ⅳ因子は、Ⅱ－２で示したグループ７）の中の３項目から構成された内容であることから、その要因名を適用し「段位制の意義」と命名した。

第Ⅴ因子は、Ⅱ－２で示したグループ６）の中の３項目から構成されており、それらは薬物・ドーピングに関する内容であることから、「ドーピングへの懸念」と命名した。

第Ⅵ因子は、

・勝敗結果重視は、剣道にふさわしくない（Ⅱ－２で示したグループ５）の30）

・剣道において試合・競技は重要で不可欠なものである（同、１）の1）

・試合は、勝たなくては意味がない（同、１）の4）

の３項目から構成されており、競技での勝敗に関する内容であることから、「勝敗の偏重」と命名した。

各因子の α 係数は、第Ⅰ因子で α =.728，第Ⅱ因子で α =.747，第Ⅲ因子で α =.775，第Ⅳ因子で α =.765，第Ⅴ因子で α =.698，第Ⅵ因子で α =.550であった。因子間相関は-.200～.218であった（表１）。

３．剣道の国際的普及に関する意識の下位尺度ごとの記述統計量

各因子に高い負荷量を示した項目の合計得点を項目数で除した値を、各下位尺度得点とした。各下位尺度得点の記述統計量を算出した結果、表２のとおりとなった。

表２　下位尺度ごとの記述統計量　（*N*=387）

	第Ⅰ因子「剣道独自の特性と試合・審判のあり方」	第Ⅱ因子「海外普及の是非・要否」	第Ⅲ因子「オリンピックへの関与と普及」	第Ⅳ因子「段位制の意義」	第Ⅴ因子「ドーピングへの懸念」	第Ⅵ因子「勝敗の偏重」
M	2.22	3.77	3.38	3.27	3.21	3.44
SD	0.64	0.81	0.89	0.86	0.97	0.56

Ⅳ．考察

１．因子と項目の関係

第Ⅰ因子「剣道独自の特性と試合審判のあり方」は主にグループ５)「剣道独自の特性の有無と維持」とグループ４)「試合判定の明瞭性と近代化、審判の問題」の項目から構成され、そこにグループ６）の項目が1件加わっている。

項目作成時のグループ５）は、第Ⅰ因子に比較的多く集まった他、他の因子（ⅢとⅥ）にも分かれて負荷した。

第Ⅱ因子「海外普及の是非・要否」は、グループ３）の構成と一致した。第Ⅲ因子「オリンピックへの関与と普及」は、グループ２)「オリンピック参入の是非」とグループ５）の項目から、第Ⅳ因子「段位制の意義」はグループ７）の中の項目から、第Ⅴ因子「ドーピングへの懸念」はグループ６）の項目の中から構成され、当初の項目作成時に想定した要因分類との一致度が高いことが示されたと言えよう。

第Ⅵ因子は、グループ５）とグループ１)「試合の要否・競技偏重の弊害」のうち勝敗に関する

項目が負荷していたことから、勝敗に関する考え方の因子と解釈可能であると判断された。

２．因子数と項目数について

因子数は当初の「項目グループ」数の７から６に減少、項目数は49から25に半減した。これらは抽出された因子に関わって有効な質問項目であるため、それぞれの因子に寄与する内容が含まれることになるが、一方、その寄与は低いが剣道の国際的普及に伴う実態をつぶさに問う項目が除外された可能性があることにも注意を払っておく必要があろう。

３．質問紙調査としての項目精査について

今回の因子分析結果に基づいて調査項目を絞るとすれば、項目数減少により調査実施が容易になると期待できる。ただし、下記事項について留意しておく必要があると考えられる。

①大学生の回答から得たデータのみを分析に用いていること

日本語質問紙による日本人回答の中で最もデータ数の多かった大学生の回答を用いた分析が、日本人剣士全体に適用しうる因子を抽出したことになるか、慎重に判断する必要があろう。本質問紙調査の想定母集団と抽出標本の関係から検討すべきところである。

②外国人（海外）データによる分析との比較がなされてないこと

使用言語が異なっても本質問紙調査の項目内容に齟齬がないかどうかを確認する目的も含め、今回の分析結果と外国人（海外）データによる因子構造が一致するかどうかを比較する必要がある。その際、仮に因子構造が一致しなかったとすれば、まず質問項目の記述内容に問題がないか今一度再検討を要する一方（外国語質問紙の作成時には剣道を熟知する有段者ネイティブのチェックを経ている）、因子構造が異なること自体は、今回の因子分析と単純比較はできないものの興味深い知見も期待できる。

Ⅴ．まとめ、今後の活用可能性と課題について

剣道の国際的普及の理想と実態について、2005年に国内外の剣道関係者にその意識を問う質問紙を作成し調査を実施したが、本稿では、その中から欠損値のない大学生387名の回答を用い、49の質問項目について因子分析を行った。

その結果、質問紙作成時に想定した７要因（項目グループ）と一致度の高い６因子が抽出された。また因子負荷量の高い項目は、49から25に絞られた。抽出された因子には以下のように命名した。

第Ⅰ因子：「剣道独自の特性と試合・審判のあり方」

第Ⅱ因子：「海外普及の是非・要否」

第Ⅲ因子：「オリンピックへの関与と普及」

第Ⅳ因子：「段位制の意義」

第Ⅴ因子：「ドーピングへの懸念」

第Ⅵ因子：「勝敗の偏重」

今後、この因子分析による精査に基づいた質問項目を活用することで、「剣道の国際的普及に関する意識」の考察にあたり、さらに効率の高い調査実施が可能になると期待できるが、今回の分析では日本語質問紙に回答した日本人大学生のデータのみを用いたこと、外国人（海外）データによる分析との比較がまだなされていないこと、などが課題として残る。大学生以外のデータを広く収集しての分析と、外国人データによる因子構造との対比を経て、将来的には国内外どちらでの調査実施にも堪える妥当性・信頼性を具備した質問紙にしたいと考えている。

註）第Ⅱ因子を「海外普及の是非・要否」と命名し、敢えて「可否」と表記しなかったのは、剣道の国際的普及にあたり（柔道がそうであるように）剣道に内在する日本的文化性が消失するならば海外へ剣道を普及させる必要はない、との意見が存在すること（好村:2002）を考慮したものである。

Ⅵ. 引用・参考文献

・Alexander Bennett：Kendo World Survey No.1 "Kendo and the Olympics", Kendo World Vol.1, 51-55, 2001.

・阿部哲史：五輪とは軸が異なる剣道-大会のあり方の検討を,月刊剣道日本６月号, 110-113, 2002.

・天野加奈子ら：剣道実践者の剣道に対する意識の国際比較について－南カリフォルニアと他地域の剣道実践者の比較から－, 関西武道学研究, 22巻1号, 1-12, 2013.

・浅見裕ら：武道（剣道）の普及・継続に関わる要因の調査研究－少年剣道を支援する大人の意識について－, 平成９・10年度科学研究費基盤研究(C)(2)09680077, 1999.

・月刊剣道時代編：特集･剣道の国際化を考える, 平成8年11月号, 11-26, 1996.

・鎌倉洋志：ポーランド共和国における剣道普及に関する研究－JICA青年海外協力隊員としての指導経験と剣士への意識調査を通して－, 大阪教育大学大学院修士論文, 2007.

・鎌倉洋志ら：ポーランド剣道家の剣道に対する意識について, 大阪武道学研究, 18巻1号, 15-25, 2009.

・剣道日本編集部：剣道は世界のスポーツとなるべきか（上）, 月刊剣道日本４月号, 86-91, 2002.

・小塩真司：SPSSとAmosによる心理・調査データ解析第2版, 東京図書, 2011.

・佐藤勇：世界剣道三十年の進展をかえりみて, 月刊剣道時代平成12年5月号, 32-38, 2000.

・徐丙鈗：今こそ剣道をオリンピック種目に, 月刊剣道時代6･7月号, 28-33, 2002.

・塩入宏行ら：小・中学生の剣道観, 全日本剣道連盟科学委員会研究調査部, 1996.

・続有恒ら：心理学研究法９質問紙調査, 東京大学出版会, 1975.

・竹内淳：剣道の海外普及を考える, 月刊剣道時代２月号, 54-57, 2003.

・植原吉朗：国際剣道の現状と課題, 國學院大學スポーツ・身体文化研究室紀要, 34, 33-39, 2002.

・植原吉朗：国際剣道の現状と課題（２）－オリンピックへの参入是非の議論－, 國學院大學スポーツ・身体文化研究室紀要第35巻, 19-25, 2003.

・植原吉朗：武道の国際的普及は、その身体・精神文化性を変容させているか, 平成16年度國學院大學特別推進

研究助成金研究成果報告書, 2005a.
・植原吉朗：剣道の国際的普及の理想と実態を問う調査質問紙の作成, 國學院大學スポーツ・身体文化研究室紀要第37巻, 1-11, 2005b.
・植原吉朗：剣道の国際的普及に関する質問紙調査の実施－完成質問紙と調査経過－, 國學院大學スポーツ・身体文化研究室紀要第38巻, 1-20, 2006.
・植原吉朗：剣道は国際的普及によってその身体文化性を変容させているか, 國學院大學スポーツ・身体文化研究室紀要第39巻, 21-32, 2007.
・植原吉朗：剣道の国際普及に伴う身体文化性認識の比較－フランスでの調査から－, 國學院大學人間開発学研究第4号, 85-102, 2012.
・好村兼一：剣道を包む「文化の器」が崩される, 月刊剣道日本５月号, 94-97, 2002.

（うえはらきちお　國學院大學人間開発学部健康体育学科教授）
（かんばなおこ　大妻女子大学人間関係学部助手、本学兼任講師）